

秋建時報

<http://www.a-kenkyo.or.jp>

秋建時報

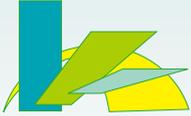
平成24年6月1日(第1217号)

発行／(社)秋田県建設業協会

秋田市山王四丁目3番10号

TEL 018(823)5495

FAX 018(865)2306



絵／文 白澤恵舟

古くて黒ずんだ陶器のカップに、繊細な花を活けてみる。
意図しなくても、お互いに素朴な色を生かしあっていておもしろい。
黄色の輝きは、梅雨の重苦しさを一瞬忘れさせる。

表彰式・第80回定時総会

一般社団法人として新たなスタート

一般社団法人 秋田県建設業協会(村岡淑郎会長)は5月28日、秋田キャッスルホテルにおいて平成24年度表彰式、第80回定時総会を開催した。今回は協会が一般社団法人に移行して初の総会となった。

定時総会に先立ち開かれた表彰式では、一般社団法人 秋田県建設業協会表彰、一般社団法人 全国建設業協会表彰、財団法人 建設業福祉共済団表彰、そして、一般社団法人 全国土木施工管理技士会連合会表彰の受賞者延べ会員企業18社、個人50名に表彰状・記念品が授与・伝達された。

続いて行われた定時総会では、冒頭に村岡会長が登壇し、東日本大震災被災者へのお見舞いを述べると共に、復興に携わる地域建設業への敬意を表した。また、協会が平成24年4月1日から一般社団法人として新たなスタートをしたことに触れ、「名称は変わりますが、会員企業への良質なサービス・情報の提供をはじめ“お役立ち度”を高めるとともに、県内の社会基盤整備並びに

地域防災の担い手として、従前にもまして役割を果たして参る所存であります」と述べ、協会の運営について意志を表明。また、今後の社会資本整備について、震災復興を前提に置き、「さらに一步進め、将来にわたって、地震や津波に負けない強くてしなやかな国土づくり、いわゆる国土の強靱化への取り組みをスタートさせるべき時期」との見解を示し、東北各県の建設業協会並びに各経済団体等と緊密な連携を図り強く訴えていくことを述べた。

なお、定時総会には来賓として、岩崎泰彦東北地方整備局副局長、坂本忠行秋田労働局長、富田耕司秋田県建設部長が出席し、議事に先立って祝辞を述べた。

議事では、はじめに一般社団法人への認可及び移行の登記完了が報告され、組織体制・呼称等について説明が行われた。その後、23年度事業・決算の報告、24年度事業計画・予算(案)が諮られ、満場一致をもって承認・可決の運びとなった。



その他、監事の補欠選任が諮られ、新監事として勝又義人東日本建設業保証株式会社秋田支店長の選任が承認された。

雇用改善推進委員会を開催

推進方針、実施計画など報告

県協会では、5月16日(水)秋田ビューホテルにおいて、秋田労働局、秋田県及び関係団体による雇用改善推進委員会を開催し、業界、行政機関の代表など9名が出席した。

会議の冒頭、小玉委員長から「報道では大学の就職率が上向きになり新卒者の就職率が回復しているとされているが、非正規雇用者が4割にもなり団塊世代の退職等もあって年金問題にも大きく影響がでており、雇用政策は国の進路を決める重要な位置づけにあると挨拶した。

引き続き協議事項に入り、事務局から平成23年度雇用改善推進事業実施状況報告、平成24年度雇用改善推進方針、平成24年度雇用改善推進事業実施計画について説明があった。その中で、24年度事業として、本年度も引き続き労働福祉の充実のため事業主、雇用管理責任者等を対象にメンタルヘルス講習会を開催するほか、高校

生向けのインターンシップや現場見学会、小型車両系建設機械等の特別教育、在学中の建設関連施工管理技術者の資格取得の支援を実施することを報告し、推進方針、実施計画が了承された。

意見交換では、委員から「23年、24年度の新規採用者数が増えている要因は何か」との質問を受けて、事務局側からは「平成21年度に企業生き残りのために大幅なリストラがあったこと、団塊世代の退職もあり、これら従業員の補充の意味の採用なのではないかと回答。また、労働局からは「メンタルヘルス対策の目玉として『秋田産業保健連絡所』『メンタルヘルス対策支援センター』等で相談や講師派遣等を行っているので活用していただきたい。さらに今年度新設された『パワーハラスメントへの取り組み』をはじめたので悪化する前に相談できる環境づくりを考えている」と説明があった。企業



側から「自社内でのパワハラより、発注者から現場代理人等へ膨大な提出書類の要求による精神的な問題のほうが大きい。担当や課によって指導や要求が違ってくる。このことから統一された相談窓口を設けてほしいとの要望を受けて、事務局は「監督員のパワハラは人間対人間なので難しい。施工側としてネゴシエーション(折衝・交渉)の力をつけることも大切。感情的にならず仕事が出るような講習等も行っていきたいと述べるなど積極的な意見交換が行われた。

秋田水風景

文と写真/加藤隆悦

フリーカメラマン兼フリーライター
取材・執筆歴/旅の手帖、WoodyLife、ペンチャー・リンク、郷、あるる他
海外取材歴/ドイツ、アメリカ、ブラジル
写真塾・写楽 主宰/写真教室、撮影ツアー企画等

Vol.34

“水鏡”のころ

北秋田市五味掘



父が国鉄マンであったから、筆者は幼い頃から汽車のある風景に親しんでいた(田舎育ちだから“電車”ではなく“汽車”である)。そのため、生まれながらの鉄道好きでもあったのだが、今のいささか過熱気味ともいえる鉄道ブームや、しばしば問題視される鉄道マニアの目に余る行状には逆に興ざめし、みずからが鉄道ファンであることは伏せておきたいような心境でもあった。

積極的に鉄道写真を撮り歩くということもしてこなかったのが、最近の鉄道ファン(いわゆる“撮り鉄”と呼ばれる連中)が、田植えの直前に田んぼに水が張られた情景を“水鏡”と呼んでそこに映る列車の写真を好んで撮っているというムーブメントは知らなかった。意識して観察していると、毎年五月頃になると、非常に多くの“水鏡鉄道写真”が撮られて発表されているようである。

改めて考えてみると、田起こしが始まってか

ら田植えまでは一ヶ月もなく、美しい水鏡鉄道写真が撮れるのは一年のうちで何日もないことが分かる。これはもう、立派な“季節の風物詩”と言えるのかもしれない。

負うた子に教えられ…の感ではあるが、自分でも水鏡鉄道写真を撮り始めてみると、これがなかなか面白く、また奥が深い。ちよつとでも風が出てさざ波が立つと、列車の姿はきれいに水面に映らない。線路端であればどこでも絵になる写真が撮れるというものでもない。

掲出の写真は秋田内陸縦貫鉄道である。赤字続きで存続が危ぶまれているのはご存知の通り。増取のてこ入れを売りたいものの、灯台下暗しというか、どこに着目して売り出していけばいいか見当をつけあぐねているようでもある。しかし、こんなに美しいニッポンの田園風景の中を走るローカル線なのだ。それをうまくアピールすれば、乗ってみたいと思う都会人は少なくないと思うのだが。

協会

高校教員との人材確保・育成推進懇談会を開催

県内企業の新卒者採用は増加傾向

協会は、5月22日(火)秋田ビューホテルにおいて、人材確保・育成推進懇談会を開催した。懇談会には県立工業高校等の建設関連学科担当教諭や、国、県を含めた人材協委員ら22名が出席。

協議事項では、23年度建設系高校生に係る事業実施状況報告、24年新規学卒者採用状況及び25年3月高校別卒業予定者進路希望状況について事務局から説明が行われた。

その中で県内の雇用情勢が厳しい中、会員の新規学卒者採用数が43社で79名と昨年の53名より大幅に増加し、地域的には由利のみ減少、他は伸びており特に鹿角、仙北、平鹿、雄勝が顕著となっている。内訳は高卒と短大・各種学校が倍の伸び、大卒が減少したことを報告。新規学卒者の採用の大幅な増加について業界側からは「急激な公共事業の減少等により企業生き残りの為に大幅なリストラや団塊世代の退職が重なり技術者の構成年齢がスムーズでなくなったことの補充による採用が大きい」「経営に余裕がなく、経験を持つ中途者の採用を優先していたが中途者は他社へ流れてしまう傾向にある。しかし何にも染まっていない新卒の高校生を一から大切に育てることにより『会社を簡単に辞めない技術者』に育成するほうがいい」と企業側も意識を変えたとの意見があり、また資格取得について「施工管理士のような技術管理の他に実際に現場で働く『現場技能士』が減っている。企業側は建設機械等のオペレーター的な技能士と両方できる人材を欲しいのが本音。生徒はデスクワークだけでなく現場のすべてを把握するという意識を持ってほしいとの声があった。また、建設業以外の就職希望者が多くなっていることについて学校側からは「建設関係の就職の受け皿が少ないこともあるが、現場のことをよくわからない生徒が多い。物づくりに対する意識向上のために長期的なインターンシップと人材発掘を要望。」

秋田労働局からは、最近の県内雇用情勢と今年度の就職に関するスケジュールの説明があり、「秋田県内の有効求人倍率は全国で40番目となっており依然として厳しい状況が続いている。求人・求職の傾向として東日本大震災以降建設業が大きく増加。今年度の新規高卒就職照会状況は県内就職希望者が2年連続増加、県外就職希望者は3年連続減少。求人も同じ傾向にある」など情報が提供された。

その他、県からは「ここ数年の豪雪や災害を経験し、県としても建設業の『地域における安全、役割』をもっとアピールしていきたい。本年度中に事業展開をし、対応策を進めながら方向性をとりまとめていきたいと述べた。最後に事務局から、平成24年度入職促進に向けた取組について学校側へ改正点等を説明した。



(財)建設業福祉共済団から

建退共秋田県支部から

※上記の記事はホームページに掲載されています。

<http://www.a-kenkyo.or.jp>

坂の上の野面積み

藤原 優太郎

春、雪が解けてから「山の學校」の近くにある湧水周辺の整備をしている。道楽半分の手作業である。水場は坂道の途中にあり道路には側溝がある。ここは市道だが途中の崖が崩れやすいため通行止めになっている。

湧水のまわりにはヤナギやケヤキなどがあってそれなりに土留の役目を果たしていたが、雪のためにヤナギが倒れ道路を塞いでしまった。また崩れた土砂が道路や側溝にはみ出して雑草がはびこっていた。もちろん側溝も土砂に埋まってまったく役目を果たさず、流水が道路に溢れていた。このような状況を目にすると黙ってられない衝動に駆られた。

「なんとかここをきれいにしたい」と思った。

まずは太いヤナギの倒木を友人にチェーンソーで伐ってもらった。それから道路を覆っていた土砂の排除に取りかかった。中には大小の転石がたくさん混じっている。この石を無駄にせず土留となる石垣にしようと思いついた。石の積み方はいわゆる「野面積み」というものだろうか、昔の人たちが手積みで造ったランダム石垣である。

毎日少しずつ作業を進めた。雑草と土砂を下の斜面に落とし、少しずつ少しずつきれいにしていった。側溝はほとんど土砂で埋まっていたのでそれを唐鍬とスコップで掘り上げて取り除いた。土木機械があれば一瞬にできる仕事ではあるが、手作業でも毎日少しずつやればやれないことはないと思った。一人黙々と汗を流した。沈思黙考の作業である。

フキノトウやコゴミ(クサソテツ)が伸び、山桜や春の野草が咲き、オニグルミの葉が開き、鳥のさえずりが賑やかになって溪流の水音も大きくなった。わずかずつだが、きれいになってゆく景観を見て清水だけではなく喜びも湧いてきた。

菊地寛の『恩讐の彼方に』をふと思った。ひとり黙々と隧道を掘り続けた前世、極悪非道だったある僧の物語だが、今、この作業をしている自分には前世のからくりも何の理由、動機、目的もない。ただきれいな湧水の確保と道路をきれいにしたいというささやかな欲望に突き動かされただけである。

1ヶ月ほどでようやく湧水の周辺がきれいになった。水もどんどん湧いて来る。少しずつきれいになってゆく作業の結果を目にすると、まわりもまた気になってしょうがない。坂の上の側溝もすべて泥や落葉に埋まっているし、法面は樹木に蔓がからみあって醜い。そこにも手が伸びた。喜びはただきれいになるという結果だけ。たまに友人が来ても「手伝おうか」の言葉はない。それはまったく期待しない。なぜならこれは一人だけの喜びにしたいと思うからだ。腰痛や手首の腱鞘炎などがまわってられない。

「野面積み」の石が底をついてきた。石積みは未完成である。下の川べりに行けば斜面から崩れた転石がいくらでもあるから今度はそれを一輪車で運ぼうと思う。毎日、山に来て、気がつけば長靴はいて軍手をはめる自分がいる。そこはなんだか運命の坂道のような気がする。桜の花びらが散り敷かれた坂の上には、いつの間にか白い夏雲が湧き始めている。



泥や石で満タンだった側溝と石積み